序文　-人口減少社会の諸相にかんする人類学的アプローチ-

千葉大学文学部教授
小谷真吾

本報告書は、平成 25 年度から開始した人文社会科学研究科研究プロジェクト、「人口減少社会の諸相にかんする人類学的アプローチ」の成果をまとめたものである。本プロジェクトは、日本全体および各自治体において、人口減少に伴って顕在化している諸問題を文化人類学の立場から調査、分析することを目的とした。

2015 年に行われた国勢調査の結果、1920 年の調査開始以降初めて日本の人口が減少に転じたことが明らかになった（総務省　2016）。この結果を待つまでもなく、近年日本の人口動態が少子化の傾向を顕著に示しており、人口が減少していくことはすでに確実視されていたことである。ただし、この結果は「人口減少社会」なる社会の在り方に対して真剣に向き合わなければならない時を迎えたことを、改めて我々に提示する意味を持っている。

ホモ・サピエンス、あるいはそれ以前の化石人類は、一貫して人口が増大するように行為・思考し、社会・文化を構築してきたと考えられている（大塚 2015）。災害や疾病、紛争により、意図に反して人口が減少することも人類史において多々見ることができるが、平均すれば人口が増大する傾向は人類の出現以来普遍的であったと言えるだろう。そして、行為・思考、社会・文化が人口を増大させるように構築されてきたとするなら、逆に構築された行為や社会は人口が増大することを前提とした形態を持っていると考えることができる。

少子化による人口減少は、そのような歴史の過程において人類が初めて経験する現象である。災害や疾病による意図せざる人口減少とは異なり、少子化は、特定の社会経済的状況化において人々がある程度意図して人口再生産をコントロールする現象である。そのメカニズムの解明については、本プロジェクトの視角を超えるものであり、他の論考の蓄積を待つしかない。一方、人口が増大することを前提に既存の社会システムが構築されているとすると、少子化よってもたらされる人口減少は、社会の様々な部分で矛盾を生じさせ、またシステム全体をカタストロフに導く可能性を持つ。人類史上初めて経験するこの現象に対して、既存の社会モデルをそのまま適応することはできず、手探りながらも新たなモデルを提示し、実践していくことが求められているのである。

ただし、そのような新たなモデルを提示する際に留意しておくべきことがある。上記のような人口減少はマクロな視野、つまり人口統計や税収などから観察される現象である。実はそのようなマクロな現象は、社会・文化を作り上げている一人ひとりの個人には直接関係がない。ミクロな視野から見える現象、つまり個人が経験している現象は、自分の子供・兄弟が少ない、後継ぎがいない、介護してくれる者がいない等、ある役割を担ってきた身の回りの人々が減り、既存の行為・思考では対処しきれないという現象なのである。そして、人々が個々の状況に対して新たに対処を試みていることを総合することこそ、人口減少社会に

対する新たなモデルを提示する唯一の方法なのだと考えられる。つまり、ある対処が身の回りの特定の問題をなんとか解決していること、あるいは様々な対処を試みつつも問題の解決の糸口が見えないこと、それらを総合して逐一記述していくことがその方法なのである。

文化人類学は、そのようなミクロな視野から現象を把握していく代表的な学問分野の一つである。現象の起こっている場に参与しながら、一人ひとりの思考・行為を直接観察し、あるいは聞き取っていくことが、文化人類学の方法の根幹をなす。本プロジェクトは、そのような文化人類学の方法・理論を用いることによって、人口が減少するという現象がミクロな場において人々にどのように経験されているかを記述していくことを目的としているのである。具体的には、以下の 3 点の事例についてフィールド調査を実施し、人口減少社会の多様な側面に関する記述を試みた。

1.奄美群島はユニークな葬送儀礼を維持してきた地域であるが、近年の社会変容に伴ってその形態が変化している。特に、人口流出による儀礼の担い手減少に対して、人々がどのように対処しているかについての記述を目指す。（立神作造）

2.千葉県中南部地域を対象として、近年顕在化してきた獣害問題に対する人々の対応に関する記述を試みた。一般的には、農業従事者の減少による耕作放棄地の増加、および狩猟者人口の減少が獣害の要因であると考えられているが、各自治体がそれらの要因に対してどのように対処しているのかについて検討していく。（福澤陽）

3.老年人口の増加、生産者人口の減少に伴う諸問題への対策として、経済連携協定（EPA）にもとづく看護師・介護福祉士の導入が図られている。特に、日本インドネシア間の EPA における個別の日常実践にかんするデータを収集し、介護福祉士の導入における問題点の整理、あるいは導入の是非自体を問い直していく。（Nazalia Kurnia Dewi）

私が拙著で考察したように、人々は、個人的な経験だけではなく、周囲の状況を俯瞰しながら内面化することによりマクロな視野から見える人口学的現象も認識し、自分の思考・行為を調整していく（小谷 2010）。拙著で扱ったニューギニアでは、俯瞰できる状況はたかだか徒歩で移動できる範囲でしかないと言えるが、日本では人々が俯瞰できる範囲は、メディアや教育を通じて日本全土、あるいはグローバルな世界に広がっている。本報告書は、上記の事例研究を比較して無理に結論を模索するよりはむしろ、事例を並列的に記述しながらメディア、教育を通じて人々が状況を俯瞰できる情報の一つとなることを目指す。問題への対処は、結局人々のミクロな場における実践によってなされるはずだが、その実践を調整する情報を提供することが本プロジェクトの着地点であると言えるだろう。

参考文献

小谷真吾　2010　『姉というハビトゥス　-女児死亡の人口人類学的民族誌-』　東京大学出版会

大塚柳太郎　2015　『ヒトはこうして増えてきた: 20 万年の人口変遷史』　新潮選書

総務省　2016　『平成 27 年国勢調査「人口速報集計結果」の公表』　総務省